說いた天才と超人との思想は結局前世紀末から今世紀に亙つての彼の尨大なる權力主義に益々その基礎を强固ならしむるの確信を與へたに過ぎなかつた。否、その影響こそ實に輕々に見逃すべからざるものとして今吾々の眼前に横たへられて居る。彼の權力主義こそ將に批判さるべきの秋にある。

更にまた文學に於ても彼は十九世紀のロマンテイスムスを窮極にまで追ひ込んだかの感がある。ルッター、ゲーテ以後に殘されたる最後の歩みを彼は完全に歩み盡したと自らをして語らしめて居る。そして象徵主義をして彼の詩的創作の最後の頂點たらしめて居る。

何れにしても彼は時代を物語るよき類型である。そしてその影響の偉大なるが故に吾々の批判もまた注意深くあられねばならぬ。

而して一個の思想家、藝術家をその時代に於ける史的必然性を以て正しく理解せんには、何時の場合でもさうである如く、その人物、時代、勞作に於て先づその人間の全風丰を把握せねばならぬ。殊に自ら體系を有つことを欲せず、存在の、概念の内に解消されることを恐れた彼ニイチエの場合にあつては猶更その生けるレーベン自體の理解が何よりも先立つて意義を有つのではあるまいか。この意味に於て生田・野上兩氏譯になるアレヴイのニイチエ傳は新しき意味をもつて吾々に讀まれることを要求して居る。もとより此の書は生活、作品と性格との忠實なる描寫であり、傳記としての域外に出ることを禁じられてある、而も尙多くの批判を讀者に訴へて居ることを認めぬわけに行かぬ。新しき時代に關心をもつ譯者が一個の對象を新しき科學の前に訴へる時そこには多大の勞苦と注意とが支拂はれねばならぬ。この書が傳記であり乍ら而も單なる傳記以上の何物かを訴へやうとして居ることは注意深い讀者には容易に氣付く所であらう。吾々はこの卷末に揭げられた年表の勞を多としなければならぬ。

とまれこの一篇は香り高きニイチエの風格を寫すに適はしき筆を以てその生活を忠實に描き出すと同時に、各時代の作品、人物書簡等悉く之を網羅して盡さゞるなく在來の流布本を茲に一掃したるかの感がある。この意味では最初的にして且つ最後的な書であるといへやう。ニイチエを知らんとする者にとつてはよき手引であり、嘗てニイチエを憧れし人々にとつては更によき理解を深めるものであらう。章毎の精密なる註釋と、卷末の文獻表とはこれらを首肯せしむるに充分である。

この全篇を通じて親しくニイチエの風格に接した人にはその人のもつジンの深さと視野の大きさに準じて更に大きく深く彼の文藝上、思想上に殘した影響の偉大さを反映することが出來やう。

（難波浩紹介）

寄贈雜誌新聞

哲學雜誌	昭和五年七月	第五二一號
丁酉倫理會講演集	同　七月	第三三三號
眞宗研究	同　七月	第三四號

大乘	同	七月	第二五卷第七號
願慧	同	七月	第九卷第七號
教育問題研究	同	七月	第四八號
奈良縣教育	同	七月	第二〇六號
學校教育	同	七月	第二〇五號
信濃教育	同	七月	第五二五號
社會學徒	同	七月	第四卷第七號
精神科學	同	七月	昭和五年第三號
帝國大學新聞	昭和五年七月二十五日	七月一日	

寄贈圖書

イデオロギーの論理學　古坂潤　鐵塔書院

アレヸイ「ニイチエ傳」　生田長江　野上巖　共譯

前號目次

表現的自己の自己限定（上）……文學博士　西田幾多郎

中世繪畫樣式の展開に就ての一考察……文學士　園頼三

フォルクルト教授の思出……文學士　長田新

新刊紹介……